審査様式２－１

氏名（本籍）	栗原　宏（茨城県）
学位の種類	博士（医学）
学位記番号	博甲第　7087　号
学位授与年月	平成２６年　４月３０日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	医師の身だしなみに関する研究（患者視点と医学生視点の比較・検討）

主　　査	筑波大学教授	医学博士	原　晃
副　　査	筑波大学准教授	博士（医学）	笹原　信一朗
副　　査	筑波大学講師	博士（理学）	三輪　佳宏
副　　査	筑波大学准教授	修士（看護）	佐藤　正美

論文の内容の要旨

（目的）

医師の身だしなみは、医師・患者関係構築に影響を及ぼす要因の一つと考えられてきた。医師の服装は時代とともに変遷し、多様化してきているため、適切な服装・身だしなみは経時的な評価が必要である。また、臨床実習においては、患者は医学生に比べ高齢であることが多く、服装に対する考え方の違いが患者との信頼関係構築の妨げとなる可能性もある。こうした背景を踏まえ、本研究は以下を目的としている。

①医師への信頼感にとって、服装・身だしなみがどの程度重視されているのかを明らかにする。
②患者から見た医師としてふさわしい服装・身だしなみを明らかにする。
③医師の服装・身だしなみの評価に関連する要因について検討する。
④患者と医学生との認識の相違を明らかにする。

（対象と方法）

質問票を用いた横断的研究で、「患者調査」、「医学生調査」に分けて実施した。着用する衣服を『服装』、装飾品や装備品、身なりなどをまとめて『身だしなみ』と定義した。

患者調査：医療機関を受診後に調剤薬局に来店した 20 歳以上の患者またはその付添いを対象として、国内 5 カ所（つくば、北茨城、新潟、新発田、御茶ノ水）の調剤薬局内で各施設 2 日間の調査を行った。

医学生調査：筑波大学（医学類 1 年生、5 年生）、順天堂大学（医学部 2 年生、6 年生）を対象に、学内にて試験等で学年全体が集合した日に調査を実施した。

調査内容（患者調査・医学生調査共通）：
医師の信頼感に影響する要因；「服装・身だしなみ」、「話し方」、「医師の年齢」、「医師の性別」、「肩書き」、「評判」について「とても重要」（＝5）から「まったく重要でない」（＝1）の 5 段階で評価を得た。
医師の服装の評価；白衣、スクラブ、セミフォーマル、スマートカジュアル、カジュアルの 5 種類の服装の写真を男女 2 セット提示し、各々の写真について「信頼感がある」、「医師として適切」等の 4 項目に対して「とてもそう思う」（＝5）から「まったく思わない」（＝1）の 5 段階で評価を得た。
身だしなみの評価；白衣の汚れ、名札の着用、履物、アクセサリーなどの 15 項目に対して「とても適切である」（＝5）から「まったく適切でない」（＝1）の 5 段階で評価を得た。
その他年齢、性別等対象者属性についても質問した。
解析方法：服装・身だしなみは相手に不快感を与えないことが重要であると考え、否定的な評価と関連する要因について解析した。単変量解析で 2 項目以上の患者属性との関連認められた服装について、医師としての適切さの評価（１：否定的（1～2 点）、0：肯定的（3～5 点））を従属変数、性別、地域、年代層を独立変数として回帰二項ロジスティック分析を行った。また、医学生と患者との相違を検討するために、服装・身だしなみの評価を従属変数、対象者属性（患者／医学生）、性別、年代層、地域を独立変数として回帰二項ロジスティック分析を行った

（結果）

患者調査は 1,411 名が来局し、524 名（37.1%）が回答した。全項目に回答した 491 名（男性 198 名、平均 51.9 歳）を解析対象とした。医学生調査は 439 名中 407 名が回答し、全項目に回答した 382 名（男性 256 名　平均 21.3 歳）を解析し、患者と比較した。

患者調査（医師の信頼感に影響する要因）：重視する（スケール 5、4 点）とした割合は「話し方」94.3%、「評判」79.2%、「服装・身だしなみ」77.8%、「医師年齢」31.6%、「肩書き」31.4%、「医師性別」16.5%であった。

患者調査（医師としてふさわしい服装・身だしなみ）：適切さの評価の平均値は男性、女性それぞれ白衣（4.16、4.33）、スクラブ（3.52、3.60）、スマートカジュアル（3.30、2.07）、セミフォーマル（2.59、2.85）、カジュアル（1.99、2.07）で男女とも白衣、スクラブの順で評価が高かった。身だしなみの否定群（1～2 点）の割合が高かった項目は、「汚れた白衣」（88.8%）、「名札なし」（85.1%）、男性医師の「ピアス」（78.4%）、「ひげ（無精）」（77.8%）、女性医師の「スカートが短い」（75.5%）、「ハイヒール」（77.2%）であった。

患者調査（医師の服装・身だしなみの評価に関連する要因）：単変量解析で 2 項目以上の患者属性との関連が認められたスクラブについて、多変量解析を行ったところ、男性医師では 35 歳未満と比べ、50 - 64 歳（オッズ比（OR）4.27；p＝0.02）および 65 歳以上（OR12.5；p＜0.01）、女性医師で 50 - 64 歳（OR3.74；p＝0.02）および 65 歳以上（OR6.99；p＜0.01）と年齢層が高い程スクラブの評価は否定的であった。

患者と医学生との認識の相違：医師の信頼感に影響する要因の評価において「服装・身だしなみ」関して患者よりも医学生の方が重視していた（4.45 vs 4.00；p＜0.01）。多変量解析では男性医師の「セミフォーマル」で患者の評価の方が否定的であった。

（考察）

医師の服装・身だしなみは患者・医師関係構築において重要な要素であり、医学生を含め、医師は服

装・身だしなみに十分気をつける必要がある。スクラブに対する評価は、患者の年代層が高い程低くなっており、スクラブなどの新しいスタイルは、特に高齢の患者には配慮が必要であると考えられた。医学生は患者よりも服装・身だしなみを重視していたが、実際の臨床実習の現場では、特に低学年で適切とは言えない服装を見かける場合がある。知識があっても行動が伴っていない可能性が考えられる。

審査の結果の要旨

（批評）

患者・医師関係の構築にとって、医師の服装・身だしなみは第一印象の構築と相まって極めて重要であると考えられてきた。とくに、医学生教育にとっては教育の第一歩としてとらえられてきた。しかしながら、そのエビデンスはこれまで明らかなものはなく、医学教育においても、医師側からの視点でしかとらえられてこなかったものと思料される。そうした意味から、本研究は、患者側からの視点もふくめた、比較的大規模な調査研究であり、今後の医学教育に果たす役割は決して小さなものではない。以上から、本研究は、博士論文としてふさわしいものと思料される。

平成 26 年 2 月 12 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（医学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。